

新春法話

良心を育てよう」

平成二十三年を迎え、謹んで新春のお慶びを申し上げます。

ようこそ、お地藏さんのお寺 正光寺の初詣にお参りいただきました。

近年、親が子を虐 やいたげ たげる、身勝手な思いで無差別に人を殺 あやめる、良い人を装って人をだますなど兇悪卑劣な事件が後を絶ちません。その多くの事件の背景には、動機という動機がなく、思いつきで、咄嗟の犯行が多いようで、犯行後、してしまったことの重大さで犯人が後悔して、罪の重さに苦しむ姿があるようです。

人の心には、良い神と悪い鬼が住んでいると言われています。心の中で「悪い鬼」が力を持てば、悪人へと変貌していきますが、完全な悪人になるまえに、普通は「良き神」が、鬼の力をそいで、心を冷静に戻し、しっかりとした善悪の判断をさせ、人を良きほうへと導きます。そのことを「良心の呵責 かしゃく」と言いますが、今日の犯罪において、犯行に及んだ人が、もし犯行前に「良心の呵責」があつたならば、未遂で終わった事件が多かつたのではないのでしょうか。

ところで、今日の家庭、地域社会で「良心」は果たして育てられているのか疑問を感じます。人がこの世に生まれたとき、心の色は純粹無垢の真っ白で、両親や祖父母、友達などと時間を過ごし、大人に成長していく過程で、様々な色に染まると言われています。親の愛情を受け、躰がなされ善悪の判断がしっかりできるようであれば明るく温かな色に、家庭内で愛情を受けず躰もされず、悪に誘惑されるままに生きていけば、心は暗く汚い色になります。だからこそ、世の中を明るくするために、生きるものの「良心」を育てることが今非常に大切なのです。

そもそも良心とは、「善悪の判断」ができるか否かです。幼少の頃では善悪の判断など出来なくて当たり前です。親や地域の人々がしっかりと子どもたちの心を見守り、悪の芽をつんで、良き芽を育て、良心の花は咲きます。自らの行為、言葉、思いを通じて、「善」なら、周りがうれしく喜んだり、温かい気持ちになること、「悪」なら、周りが傷つき、怒ったり、寂しい気持ちになるのだということ、家庭や学校で、地域社会でしっかりと教えることが肝心です。子どもたちは知らず知らずしてきた自分の行いを、周りに褒められたり、怒られたりして、経験を積み重ねて「善悪の判断」を身につけていくことでしょう。そして、自ら善悪の判断がしっかりできてこそ「成人」つまり大人になるということです。

しかし大人になっても、良心を見失うことのないように心がけなくてはなりません。仏の教えの中に、「慙愧 ざんき」という言葉があります。自らの行為・言動を振り返り、他人に対して迷惑をかけたかどうか考え、かけたならば自らを恥じて悪行を恐れる。」という意味の言葉です。日々慙愧を通じて、自らを律することで良心は堅固なものとなるといえます。

最後に「正月」とは、「修正 ちゆしやう 月」の略語です。修正とは、心身を正しく修めるつまり、自らの心をのぞき、善悪の判断がしっかり出来ているかどうか点検するということです。初詣におまいりくださいました皆様におかれましては、新年を迎え、心身を正しく修め、ご本尊さまのご加護を頂き、皆様各々の希望にむかって今年一年邁進されますことをご祈念申し上げます、新春法話とさせていただきます。

合掌

平成二十三年 辛卯年 元旦

延命山正光寺 住職 高野隆晃